

他者の考えを認め、自己の考えを追求できる道徳の時間の工夫

— 自分のもととして考え、議論し合える発問を通して —

特別研修員 道徳 松島博昭(小学校教諭)

児童の実態

自分の考えを伝えられるが、他者の考えを受け入れることができない。
自分の考えを伝えられずに、他者の考えに依存してしまう。

授業実践「絵手紙と切手」 本当の友情 2-(3)信頼・友情(出典 学校図書)

概略:主人公の広子が、仲良しの正子から届いた定形外郵便の料金不足について、本人にそのことを知らせるべきかどうかを迷う話である。広子は、葛藤しながらも正子に教えることを決心する。

手立て

- ・価値の方向づけ、価値に迫る補助発問
- ・自分のもととして考え、議論し合える発問

①価値の方向づけをする補助発問

中心発問で葛藤させる場面につながる発問をし、議論をする際に考えを深める一助として活用できるようにする。

「注意されるとき、どんな気持ちですか。」

自分が嫌な気持ちになる派

自分が悪かったと反省する派

うるさいな。
イライラする。

次からは気をつけよう。
自分が悪かった。

②自分のもととして、議論し合える発問(中心発問)

葛藤場面を教材から抽出し、主人公の立場ではなく「もし自分だったらどうするか」の発問によって自分のもととして考えて意見を主張できるようにする。

「手紙の不足料金のことを自分だったら、相手に伝えますか？」

STEP1:自己の考えを伝える

自分の立場を明らかにさせるためにノートに自分の立場を書かせる。
なぜ、その立場なのか理由も書き、発表する。

A:「伝えます。
なぜなら、友達だからまた同じ間違いをして欲しくないから。」

B:「伝えません。
なぜなら、もう手紙を送ってられないかもしれないから。」

STEP2:多様な考えを認める(議論し合う場面)

友達の意見を聞きながら分かったこと・気付いたこと・思ったことを付け加えるようにする。
その際に、友達の意見に対する自分の考えを書き、議論し合う。

「Bさんの意見についてです。
もし、伝えなかったら相手がまた同じ間違いをしてしまいます。」

「Aさんの意見についてです。
もし、伝えたとしたら相手を傷つけてしまいます。」

STEP3:自己の考えを追求する

議論した後に、友達の考えを踏まえた上での最終的な自分の考えをノートに書き、発表する。

「最初は、伝えないと思っていたけれどみんなの意見を聞いて、友達のことを考えると伝えた方がいいと思いました。」

③主人公の行動から価値に迫る補助発問

議論した後に、主人公がとった行動について知らせる。
主人公がなぜそのような行動をしたのかについて考えさせることによりねらいとする価値に迫る。

「なぜ、正子さんはわかってくれたと思ったのですか？」

親友だからわかってくれたと思った。

目指す児童像

他者の考えを認め、自己の考えを追求することができる児童

成果

- 葛藤場面を取り上げ、発問をすることによって多様な考えを引き出すことができ、友達の意見を聞いて自分の考えを変えたり深めたりすることができた。
- 「もし自分だったらどうするか」という発問をすることで、自分のもととして考えた意見を発表することができた。

課題

- 議論し合う場面で、児童の意見を種類別に色分けした板書をしたり、一つの意見に対して全員で考える場面を設定したりするなどして児童の意見を深める手立てが必要である。
- 授業の感想や議論した意見をクラスに掲示したり、児童の意見を学級通信で紹介したりするなどして個人からクラス全体の学びに広げる手立てが必要である。